

蛇じゃ造りづくの行なわれる場所

「安行原の蛇造り」は安行原の中でも4つの字、中郷・半縄・小清水・向原の人々によって行なわれてきましたが、この4つの小字は、地形的には大宮台地南端の鳩ヶ谷支台という台地上にあります。安行原全体の地形は、西側がこの鳩ヶ谷支台の上であり、東側は綾瀬川右岸の新田開発のために開削された伝右川と、見沼代用水東縁から分かれた赤堀用水に挟まれた低地となっています。

安行原は明治22年までは原村として独立した村でした。文化・文政期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の原村の箇所には「三沼代用水をひきて水田にそそげども早損あり」と記されています。また、明治初期の『武蔵国郡村誌』には、「赤七分黒三分質悪しく稲麦芋に宜しからず水利の便なきに非れども時々水旱に苦しむ」とあり、物産については米、大麦、小麦、大豆、甘藷が記されています。こうした記述から、早魃に苦しめられていたことや、作物を育てるのに苦労した昔の人達の様子が伺えます。

また、蛇造りの行なわれる「ジガケ」は向原に位置していますが、この前を通る道は代官頭である伊奈氏の陣屋、赤山陣屋に繋がる赤山街道のひとつでした。こうした人の行き来がある道の前に蛇が置かれたということは、道を通って入ってくる疫病や災難が4つの字に入らないように蛇の力で防ぐという意味があったとも考えられます。

＜安行原全域図＞ □ 安行原の範囲 □ 安行原の内、中郷・半縄・小清水・向原の範囲

